

コシアブラの栽培

平成10年にコシアブラの資源分布と生産実態について調査を行った結果、県下各地に点在していることが確認されている。しかし、一般にも知られ始め、タラノメに並ぶ人気の出てきたコシアブラは主に天然木から採取されており、高木からの葉や芽の採取は非効率的であること、人工栽培の事例は極めて少ないことから、今後コシアブラの振興をはかるためには効率的な生産、採取方法の検討が必要であり、今回は各種の報告事例等を基に苗木の養成を試みた。



養成中のコシアブラ

1 取り木試験

苗木の確保には、播種、取り木、山引きの方法があるが、実生による養成より苗の養成が早くできる取り木法の実証を行った。

前年に成長した枝を10mm前後の環状剥皮（樹皮を全部剥ぐこと）を行い、オキシベロン1000倍液にミズゴケを湿らせて、剥皮した部分に一握り程度の量を10cm位の長さに巻き付け、その上を蒸発

防止のためビニールで覆い、上下を針金で固定した。

ビニールはマルチ用黒ポリ、針金は観賞菊の栽培などに使われるビニタイを使用した。

取り木は、5月下旬から7月中旬が適期とされているが、作業の都合上7月の下旬に実施した。

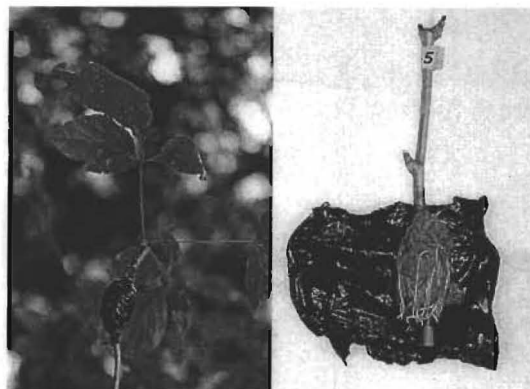
4ヶ月後の11月にそれぞれの親木から、取り木した部分を切除し、苗木に巻いたビニールを取り外したところ、発根状況は次のとおりであった。

表-1 コシアブラ取り木結果

本数	発根本数	発根率	カルス形成	枯損本数
21	5	23.8%	12	4

供試木及び供試箇所

取り木に供したコシアブラは、構内に生育している30年生位の高木と、その周囲にある樹長1m前後に成長した実生苗を使用した。高木の枝は手の届く範囲の下枝とした。



(取り木状況)

(発根状況)

今回の試験では、発根率が23.8%であり、予想を大きく下回る結果となった。発根率の低かった原因としては、試供木の57.1%が発根はしていないもののカルスは形成していることから、当初できるだけ枯損をさせないように、剥皮する幅を10mm前後と小さくしたために、剥皮作業後に形成したカルスが上下で繋がったことによって発根しなかったと思われる。また、枯損した4本は、剥皮部分の平均直径が4.8mmであり、発根した枝の平均直径7.8mmに比べ細く、取り木の枝の選定は成

長のよい7 mm以上の枝を活用の方が発根率は高くなると思われる。

11mm以上の枝を使用した4本もカルスを形成したものの発根していなかったことから、10mm以上の太い活力がある枝を使用する場合には、剥皮幅をさらに広げる事によってカルスの上下の接合は防止できるものと考えられる。

表-2 コシアブラ径級別取り木 (本)

	5mm 未満	5~7mm 未満	7~9mm 未満	9~11 mm	11mm 以上
発根			4	1	
カルス形成	1	1	4	2	4
枯損	2	2			

茨城県林試の試験報告では、4~7年生(平均樹高1.5m)の前年枝部分を使用し、剥皮幅を3cmとした5本の試験結果では発根率100%の報告があることから、7mm以上の枝を使用して取り木する場合は剥皮幅を2cm程度、10mm以上の枝は剥皮幅3cm程度が目安と考えられる。取り木の時期については、7月下旬に行い発根は確認できたものの、十分な発根量を確保し、移植後の成長を図るには早い時期に行う方が望ましいと思われる。

2 収穫調査

春先の山菜の生長は早く、適期に収穫することが収益に影響することから、構内で採取した芽を大葉、中葉と市場で流通している小葉(今回の調査の都合上小葉とした)に区分してその重量測定を行った結果は表-3のとおりであった。

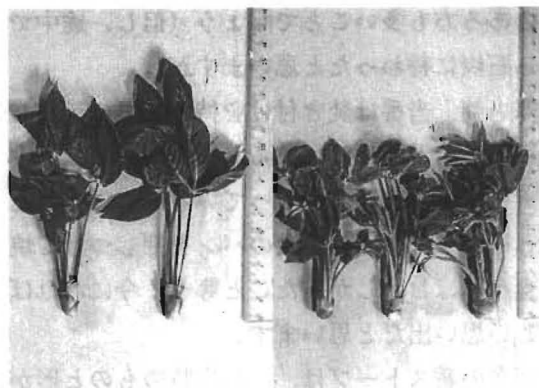
表-3 コシアブラ収穫調査

	葉柄数 (1株)	茎長 (cm)	株重 (1株/g)	平均茎重 (g)
大葉	10	24.25	33.5	3.35
中葉	7.8	16.4	12.5	1.60
小葉	10.3	11.0	8.0	0.8
側枝	4.3	11.8	3.5	0.8

今回の結果から、小葉の頭頂部と側枝部の芽についてみると、葉柄1本当たりの重さはほぼ同じであるのに対して、1株当たりの葉柄数の違いによって頭頂芽の重量が2倍以上となっている。このことから今後効率的な栽培を行うためには、い

かに頭頂芽の収穫割合を増加させるかがポイントになると考えられる。

頭頂枝の増加は、樹高を高くしてクローネを大きくすることで可能となる反面、採取効率が悪くなる。採取効率をよくする為には地上から採取可能な高さにして管理すればよいが、コシアブラの性質上、側枝の発達はあまり期待できないことから、1本の木で採取できる頭頂芽の数は限定される。



(側枝芽)

(頭頂芽)

これらの対策としては、植栽密度を高くして採取量を確保するか、中庸仕立てを行いある程度の太さに成長した時点で伐倒し萌芽させる方法等が考えられるが、現時点では適正密度、萌芽効率など解明されていない点が多く、芯止めによる側枝の成長調査等も含めさらに検討が必要である。

3 今後の課題

現在、コシアブラの人工栽培事例は少なく、苗木の流通量も限られているものの、春先にはスーパーの店頭や、各地域にある道の駅などの店先をにぎわせる山菜であり、さらに需要の増加が見込まれることから、手入れを行った里山などの林間利用や、荒廃農地の活用による栽培の可能性が高い。

今後、農山村の振興作目として定着を図るためには、苗木の養成方法とともに、優れた系統を持つ品種の選抜などより効率的に人工栽培を行う上で必要な技術開発が課題である。

(特産部 小坂)